

テクノ社会における技術と人間 —技術による徳性の補完について—

堀内進之介 首都大学東京 客員研究員



はじめに

情報工学、遺伝子工学、脳神経科学をはじめ、データの収集と解析を基礎とする先端科学技術（以下、新技術）は、私たちに大きな利益をもたらすと期待されている。しかし、理論物理学者のS. Hawkingやコンピュータ科学者のS. Russellなど、世界的に著名な学者たちは、むしろそれらは人類にとって重大なリスクになり得ると警鐘を鳴らしている。

新技術は、人類史上類を見ない未来を、その期待と警鐘の中で形作るものだとすれば、どのような未来を望み、そのためにいかに新技術を御するかが問われねばならない。この問いは不可避であると思われる。

けれども、この問いが、人間を技術から独立した存在と見なし、人間による技術の制御として発せられるならば、有益なものにはならないだろう。なぜなら、それは人間と技術の歴史を見誤っているからである。

歴史において、人間は技術を生み出してきたが、技術もまた、特定の思考、行動、

価値評価のパターンを生み出してきた。それは、人間の営みに新たな可能性をもたらし、他者との共生を豊かにすると同時に、貧しいものにもしてきた。例えば、弓と矢の発明は、家族や仲間たちのために、動物を安全な距離から殺傷することを可能にしたが、敵対する人間に対してもそうすることを可能にした。この例が示唆する通り、技術はいつも人間の社会的・道徳的な営みの可能性と複雑性を開き、その意味で、技術もまた人間を産み出してきたのである。その意味で言えば、反技術であることは、反人間でさえあるのだ。

そうであれば、先の問いは、人間と技術との相補性を踏まえて、つまり、技術を制御せんとする倫理それ自体が、常に技術的な文脈に組み込まれていることを念頭に発せられねばならないと言えよう。

今日の人間の営みは、かつてない仕方や程度で、私たちの生活や人生を支え、媒介する技術に依存している。それはつまり、技術はとうに生活や人生の不可欠な一部だということである。この事実は、現在

の、そして、これからの技術と人間の関係に関する選択は、単に道徳的な選択ではなく、「技術的—道徳的」選択だということも意味している。

もう一つの重要な事実は、目下の人間の場合は、ハイテクの未来を最初に想像した時に描かれた、どんな世界よりも遥かに複雑で、ダイナミックで、不安定だということである。それは、これまでに登場した技術、開発途上の技術の何れもが、使うか捨てるかを容易に選択できる単体の道具ではなくなっているからだ。それらは、生活や人生の様々なレベルで有機的に結びついている。換言すれば、技術のダイナミズムや不安定さ、すなわちリスクは、私たちの生活様式に最もうまく統合され、組み込まれているところで、最大になるということだ。技術による災禍は、技術そのものが惹起するというよりも、技術を用いる私たち人間の社会に由来するのである。

してみれば、新技術の開発動向を予測すること自体は、さほど重要なことではないと言えよう。むしろ技術を手に入れた後に、私たちがその技術に対してどのような役割を果たすのか、そして、技術が私たちに対してどのような役割を果たすのかを見極めることの方が、はるかに重要なのだ。人類史上類を見ない未来は、新技術が決めると

いうよりも、新技術が社会の慣習、価値観、制度にどのように組み込まれるかによって決まるのだから。

それゆえ、私たちは、新技術に期待するにしても警鐘を鳴らすにしても、目下の技術的な文脈の中で、それを十分になし得る存在として、自らを陶冶することが不可欠だ。もっと言えば、新技術のもたらす目先の、あるいは表面的な利益に動機づけられるのではなく、「技術的—道徳的」選択として、新技術をどのように生活や人生に組み入れるかを想像し得る資質や能力を養わねばならないのである。

私たちの目下の、そして、これからの環境での科学的、政治的、文化的な変化が性急であることを考えれば、不測の事態や不透明な影響はより深刻になると予想される。

それに対して、どのような事態や影響にも対処可能な、普遍的で抽象的な原則を見出すことは現実的ではない。変化の激しい状況においては、普遍的で抽象的な原則よりも、その都度、状況に応じた適切さについて熟慮する徳性を涵養すること、そうした倫理的な戦略が必要ではないだろうか。

本稿ではこの点について、つまり、これからのテクノ社会における、私たち人間の徳性について、米国の技術哲学者S. Vallorの議論（Technology and the Virtues）を参照

しつつ、少しばかり考えてみたい。



テクノ社会における道徳的判断

これからの技術と人間の関係に関する選択は、単に道徳的な選択ではないと述べた。それはなぜか、もう少し掘り下げてみよう。

道徳的な判断をどのように行うべきかに関して、例えば、18世紀のドイツの哲学者I. Kantは、単一の道徳法則に従うという、定言命法として知られるアイデアを提供している。ごく簡単に言えば、道徳的な判断を要する場面では、個別的な条件や目的、動機を顧慮せずに、全ての人々が普遍的に従うことができるか否かを考え判断せよ、というものだ。このアイデアは、非常に抽象的で一般性が高いので、これからのテクノ社会でも有効だと思うかもしれない。しかし、例えば、全ての人々の行動や考えが記録されるデータサーベイランス社会という未来は、記録の方法や管理主体、権利などを最低限知ること無しには、Kantのアイデアを用いても、合理的かつ普遍的に一貫した方法で道徳的な判断を行うのは容易ではない。テクノ社会は、Kantのアイデアを試すには、いささか複雑すぎるのである。

では、19世紀のイギリスの哲学者J.

BenthamとJ.S. Millのアイデアはどうだろう。そのアイデアは、利用できる行動指針のうち、その影響を受ける人に最大の幸福を約束する指針が何かを計算し選択せよ、というものだ。しかし、これも容易ではない。というのも、新技術のポテンシャルはあまりにも不透明で、あまりにも多すぎるので、どのような結果が生じるかを信頼できる確率で予測することができず、さらに、そうした技術と社会的慣行、制度の相互作用を考慮すると、予測はいつそう困難になるからだ。BenthamやMillの時代とは異なり、過去の事例から類推するという仕方では、上手く功利的な計算ができないのが、テクノ社会なのである。

テクノ社会の前例のないほどの技術的・社会的不透明さを考えると、道徳的な判断は不可能にも思える。とはいえ、それを放棄するのは、新技術のリスクを余計に増幅させることになるだろう。それゆえ、私たちは、どうにかして新技術と共に生きる可能性、そして、私たちが上手く生きられない可能性をもっと頻繁に想像しなければならない。

かつての時代に、道徳的な判断に関するアイデアを生み出したように、テクノ社会の複雑性は、要するに道徳的な判断に関する、新たなアプローチを生み出す必要があることを示唆しているようにも思われる。



新たなアプローチとその基礎

テクノ社会を前に、道徳的な判断を性急に下すことを促したり、反対にそれをしり込みさせたりする警鐘は、警鐘の本来の目的、すなわち熟慮する機会をもたらすという目的を大いに損なうものだ。なぜなら、そうした警鐘は、これまでも散々に鳴らされてきたために、更に上積みすれば、警鐘それ自体を真剣に聞かなくても差し支えの無いものと余計に誤解させるからである。

それゆえ、そうした警鐘よりも、むしろこの半世紀ほどの間に登場した技術が、国境を越えて国や人びとを経済的・物理的に強く結びつけ、情報、規範、アイデア、価値観を広く伝達することを可能にしたという事実、まず耳を傾けてもらう方が良いのではなかろうか。

そう思うのは、次の理由からでもある。新技術は、身近な所だけではなく、地理的に遠く離れた人びとや環境に影響を及ぼし、さらには将来にも多大な影響を与える。それゆえ、新技術に関する道徳的な討議や、特定の技術的・道徳的習慣や徳性を育成するにしても、それらは世界的なコミットメントを必要とする。そうであれば、技術によって、人びとの結びつきやコミュニケー

ションが取り易くなったという事実は、これからのテクノ社会を考える上で、またと無い機会をもたらしているとも言える。

不安や危機感を煽るのでも、手放しに利益を見積もるのでもなく、希望がどこにあるかを伝えることは、人間と技術の相補性を適切にバランスする意欲や動機を生み出す重要な実践であろう。

幸いにして、この点に関する希望は、新技術それ自体の中にもある。データの収集と解析を基礎とする新技術は、以下で触れるように、経済的な利益の増大に始終するものではなく、「技術的—道徳的」選択を可能にする、そうした徳性を私たちが持てるように設計され、利用される可能性がある。

繰り返せば、技術を社会に組み込む際に、私たちがその技術に対してどのような役割を果たすのか、そして、技術が私たちに對してどのような役割を果たすのかを見極める、そのための資質と能力を、すなわち徳性を涵養したり、補完したりするものとして、新技術は活用し得るのである。



技術による徳性の補完

新技術の活用はどのように為されるか？ それを考える前に、そもそも徳とは何かに

についても少しばかり触れておこう。

徳 (virtue) は、ラテン語の「virtus」が語源であり、古代ギリシア語の「卓越」を意味する「arête」に結び付いたものだ。古代ギリシア語の「卓越」は、独特の機能を発揮することができる安定した形質を意味している。例を挙げれば、ナイフの主な徳性とは、モノを切り裂く鋭さと言える。

紀元前5世紀と4世紀のプラトンとアリストテレスによる倫理の哲学的議論では、人間の卓越さは、性格の優秀さを伴う明白な道徳的感覚とされている。儒教では、正義や正しい見通しを育むもの、仏教倫理では、行動を正しく調和させて立場を保つものを意味する。このように、「徳」の概念は、道徳的な卓越性として理解され、何千年にもわたって、人間の行動に関する種々の規範を導くものと理解されてきたのである。

さらに言えば、徳性＝性格の優秀さは、天与のものではなく、培わなければならないものともされてきた。そして、徳性を養うことは、その人が善く生き、幸せに暮らすための条件だとも考えられてきたのである。

このような意味における徳性が、これからのテクノ社会で、ますます重要になると思われる理由は、すでに述べた通り、複雑性や不透明性が増大すると予想されるテクノ社会で、普遍的な道徳法則に従うことや、

功利的な計算を合理的に行うことは容易ではなく、それゆえに、状況に応じた適切さについて熟慮することが必要になると思われるからである。

状況に応じた適切さは、例えば、新技術に関する疑問に対して、どのような場合にも適用させる原則に従い「はい／いいえ」や「正しい／間違い」といった二値コードで回答することとは、根本的に異なる。そうではなく、それは、次のような問いに答える中に見出されるものである。

何が『より良い』と見なされるのか、どのような人物が『より良い』人間なのか？

これらの問いには、技術に媒介された目下の社会環境の中で答えることが不可欠だ。そうすれば、少なくとも次のような人物は「より良い」とは言えないことが分かるだろう。すなわち、生まれ育った地域を超えて他者に共感したり、異なる価値観を持つ他者と上手く対話したりすることができず、そして、大きな不確実性とリスクを伴う状況で、貧しい推論を行う人物である。

この人物が「より良い」と言えないのは、かつてとは異なり、目下の社会では、地球規模で多様な価値観を持つ他者と対話し、データに基づいて堅実な判断をすることが

当たり前になっているからだ。これらはすべて、技術が可能にしたことである。このことから、状況に応じた適切さについて熟慮する徳性が、技術と無関係ではあり得ないことが分かるであろう。

これまでに登場し、社会に組み込まれた技術が徳性と無関係ではないように、これから登場し、社会に組み込まれて行くだろう技術も、私たちの徳性と何らかの関わりを持つことは否定しえない。したがって、そうした技術によって、私たちの悪徳が増長されることなく、より好ましい徳性が育まれるように水路付けることが必要だ。

具体例を挙げよう。状況に応じた適切さを見出すには、衝動や欲望に振り回されずに自制的でなければならない。実際、多くの研究が、注意力や意志力の分散は、行為や思考のパフォーマンスを下げることを証明している。この観点から、デジタルメディアの弊害が、これまでも幾度も指摘されている。インターネット依存、ネット中毒といった言葉も登場している。

このような状況に対して、デジタル・デバイスから適度に離れることが推奨されているが、こうした推奨が単に「道徳的」な選択として提示されるなら、つまり、技術を遠ざけることでしかないなら、その推奨はほとんど実効的ではない。テクノ社会で実効的であ

るためには、いまや、いかなる選択も「技術的・道徳的」選択でなければならない。

要するに、技術を用いて、技術に対する懸念事項を緩和する工夫が必要なのである。デジタル・デバイスの使用時間を通知したり、自動的に反応速度を落としたり、利用開始時に十分な意思確認をさせる工夫は、私たちに、正直、勇気、節度、忍耐を思い出させる契機になると期待できる。

意志力などの人間の内部を起点に懸念される状況に立ち向かうのではなく、人間の外部からのデジタル・デバイスの働き掛けを起点に、そうした状況に立ち向かうのは、「環境を変える」という往年の処方箋を、テクノ社会においてリバイスしたものだと捉えてはどうだろう。さもなければ、傍に寄り添って、その都度、逸脱的な振る舞いに警告を与えてくれる親密な他者の役割を、技術が代替していると捉えてはどうだろう。そう捉えてみるなら、技術は、私たちが状況に応じて適切に振る舞うための徳性を涵養したり、補完したりする役割を果たし得ることが分かるはずだ。

◆ 寄り添う技術

技術が寄り添うという意味では、身体的・

精神的なケアを担うソーシャル・ロボットにも、そうした役割が期待される。人工知能や先端ロボットは、公的な場面での活用が注目されがちだが、私的な場面、さらには私密的な場面での活用も進んでいる。それらは、技術による徳性の涵養という本稿のテーマにとっては、特に重要なものだ。

新技術は、労働生産に関わるものばかりではなく、福祉や健康にも関わり、その一環として極めてプライベートな、性的な部分に関わるものもある。一般に「セックス・ロボット」と称されるものがそれに当たる。

2017年の調査では、アメリカの成人の約半数が、今後50年以内にロボットとセックスするのが一般的な慣習になると予想している。この予想からすれば、ロボットとの親密な関係は、今後、より広範なものになる予想される。

セックス・ロボットの開発や使用は、それが表象する女性や子供、あるいは男性への共感を破壊することに繋がると批判されてきたが、近年の調査研究では、そうしたロボットと購入者との関係は、「愛情」や「仲間意識」によって特徴づけられており、所有者の孤独を癒やすことはあっても、対人関係や他者への共感を必然的に破壊するというものではないことが明らかにされている。その意味では、セックス・ロボット

はむしろ、「パートナー・ロボット」と呼ばれる方が適切なのかもしれない。

セックス・ロボットの表象のされ方や使用の仕方の中には、性暴力として非難されるべきものが確かにある。しかし、「パートナー・ロボット」とでも呼べるロボットとの親密な関係の中で、その一部として性的な関係を持つということも、今後はあり得てくるだろう。

「愛情」や「仲間意識」に基づく関係、あるいは「孤独の緩和」は、人が人に対して為せる、その人の徳性を豊かにする重要な貢献だ。それが希薄になるところで、それを補完し得る技術は、どこに課題があるだろうか。人を物のように扱うべきではないからと言って、物を人のように扱うべきではない、ということにはならないはずだ。

パートナー・ロボットとの親密な関係はどのように見なすか。普遍的で抽象的な原則からだけでは、満足する答えは得られないだろう。これに答えていくにも、やはり、テクノ社会における徳性を養っていくほかはないのだ。

※参考文献

「はじめに」で述べた通り、本稿は下記を参照している。

Vallor, S., 2016, *Technology and the Virtues: a Philosophical Guide to a Future Worth Wanting*:

Oxford: Oxford University Press.

プロフィール.....

ほりうち・しんのすけ 首都大学東京客員研究員、Screenless Media Lab.所長ほか。1977年生まれ。社会学(博士)。社会システム、技術、環境と人間(の主体性や善き生)の関わりについての研究を専門とする。近年の主たる研究テーマは、技術的進歩と民主的社会変革の融合の可能性について。著書に『人工知能時代を〈善く生きる〉技術』(集英社新書)、『感情で釣られる人々』(集英社新書)、『知と情意の政治学』(教育評論社)、共著に『AIアシスタントのコア・コンセプト』(BNN出版)他多数がある。